

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）

県政の課題（テーマ）報告書

令和 2年 10月 16日

山梨県知事 殿

氏 名 福田 和
留 学 先 アメリカ合衆国アイオワ州
留学期間 令和 元年 8月14日～
令和 2年 3月28日

1 研究の課題（テーマ）

アメリカでのユニバーサルデザインによる観光まちづくりの研究と体験型研修

2 概要

与えられた県政の課題（テーマ）の解決に導く考え方及び対応策等

現在の山梨県の観光まちづくりにおいて、ユニバーサルデザイン（UD）の導入が遅れているという実態がある。具体的には、施設の整備や情報発信、ユニバーサルツアーの不足などが挙げられる。そこで私は、UD 発祥の地であり多民族共生国家であるアメリカでアイオワ州を拠点とし、UD がどのように観光まちづくりに取り入れられているのかを調査していた。新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け留学を中止したため、実現が叶わなかった計画もあるが、留學生活中に見聞きした UD のうち山梨県でも導入の検討が可能だと考えたものについて、ここにまとめる。

アメリカでは UD の中でもとくに“アクセシビリティ”が重要視されている。アクセシビリティとは、建物や公共交通機関、インターネットのウェブサイトといった情報システムなどが、様々な人にとって使いやすいものであるかを考える際に用いられる概念である。こうした概念を基に、近年アメリカでは、UD に関する様々なガイドラインが作成され、法制化、まちづくりへの導入も進められているという。

（Drake University にて UD の研究を行っている Molly Wuebker 先生へのインタビューより。）実際に、私がまちの中で見聞きしたものだけでも多数存在した。山梨県でも平成 20 年 3 月に「公共建築のユニバーサルデザインに関する指針」が発表されている。しかし、同指針は地方自治体や観光施設に活用が義務付けられているものではなく、認知度や、UD の導入状況に関する調査が行われていない。したがって、今後山梨県で UD を積極的に導入するためには、同指針の活用を義務づけるなど、活用方法を再考し、実際に UD を導入するためのきっかけづくりを行うことが必要であると考え。これに加え、同指針のチェックリストの「情報」の項目に、ウェブサイトに関するチェックポイントを追加すべきだと考える。ウェブサイトは、観光客が目的地を決め旅行の計画を立てる際、“最初に訪れる場所”になることが多いためだ。（添付書類（2）。）

ユニバーサルツアーに関しては、残念ながら、体験的に学ぶことが叶わなかった。アメリカや、日本各地のユニバーサルツアーについて、今後も継続して学んでいくつもりだ。

3 添付書類

米政府機関の一つである「United States Access Board」¹では、UD に関し 7 項目から成る 30 のガイドライン「Principles of Universal Design」を定めている。さらにアメリカでは、同ガイドラインの策定に加え、まちの中で実際に様々な UD が導入されていた。

(1) 施設や公共交通機関における UD の導入

様々な施設やまちの中で私が驚いたのは、段差の少なさだ。スロープが配備されており、車いす利用者にはもちろん、誰に対しても利用しやすいつくりになっていた。その一例として、米国最大級の動物園 Omaha's Henry Doorly Zoo and Aquarium がある。園内に段差を通らなければならない箇所は私が確認できた限りではなく、また園内の通路は、車いす利用者やベビーカーがすれ違い、一回転できるほどの幅が十分に確保されていた。さらに落下防止のための柵の高さが比較的低く、子どもや車いす利用者の目線からも動物が見やすいつくりになっていた。日本では、現在高齢化が進んでおり、今後車いすを利用する観光客の数はさらに増加することが予想される。したがって、山梨県内の観光施設においても、スロープの整備や、十分な幅が確保された通路の整備の需要が高まっていくと考えられる。さらにこうした環境整備は、観光客のみならず、地域住民が安心して暮らせるまちづくりを実現するための一助となると考える。

写真 1、柵の高さが低く車いす利用者の目線からも動物が見やすい



(出所) 筆者撮影。

¹ United States Access Board (<https://www.access-board.gov/the-board>:2020 年 10 月 16 日現在。)

写真 2、幅の広い通路



(出所) 筆者撮影。

次に驚いたのは、デモイン市内を循環する全てのバスが、UDに対応していたことである。バスの前方に車いす利用者のためのスペースや優先席があり、車いす利用者が乗車する際は、運転手が手際良く座席の調節をして準備を整え、車体からスロープを出し、乗客を迎えるというのをごく自然に行っていた。また、すべての乗客が乗車する際に車体を下げてくれたことも印象的だった。歩幅の小さな子ども、足に負荷のかかりやすい高齢者、動きが制限される妊婦など様々な人にとって嬉しい心遣いであると感じた。

さらに、バスのフロント部分には、自転車を積むことができるラックがあり、乗客は無料で利用していた。観光地において自転車ツーリズムなどを推進する場合には、観光客がどのように移動するかという点まで想像し、自転車での移動と公共交通機関の利用をセットで考える必要があると考える。輸行可能なバスの整備を進めることは、アクセシビリティを高め、最終的には観光客や地域住民に、より快適に過ごしていただくことにつながるのではないだろうか。

写真 3、デモイン市内を循環する UD 対応の DART バス



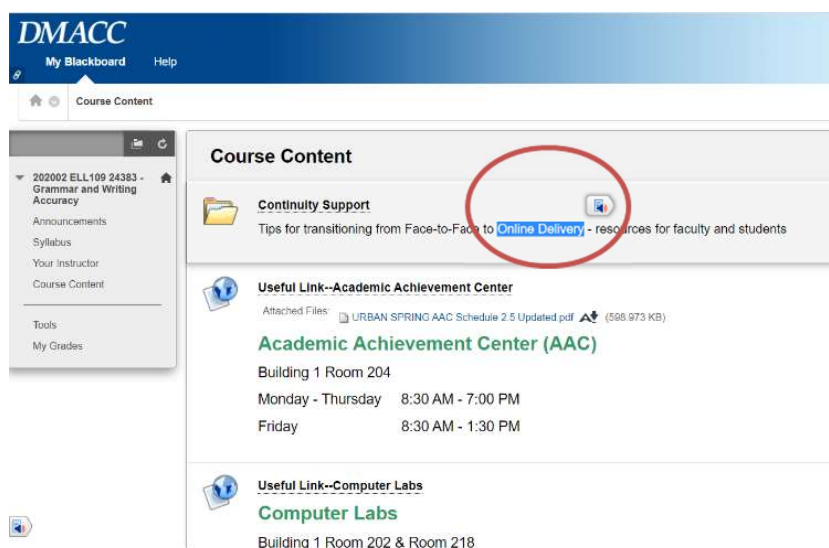
(出所) 筆者撮影。

(2) 情報発信における UD

近年、観光地に関する情報を収集するための手段として、インターネットは大きな役割を果たしている。したがって、観光ウェブサイトも様々な利用者を想定してデザインする必要があると考える。その例として、文字の大きさや色の設定（カラーユニバーサルデザイン）への配慮、音声読み上げシステムの導入などがある。私の留学先である DMACC のウェブサイトには、音声読み上げの機能がついていた。

一方で私が調査を進めるにあたり疑問を抱いたのが、視覚障がいを持つ方がどのようにサイトにアクセスするかという点である。ウェブサイト内の UD 化を図っても、利用者がそこにアクセスできない場合、アクセシビリティが十分でないということになるのではないだろうか。今後同課題への対応方法について模索していきたい。

写真 4、音声読み上げ機能のある DMACC のウェブサイト



(出所) DMACC Blackboard (<https://dmacc.blackboard.com/ultra/course> : 2020年4月5日現在。)

次に、ウェブサイトで提供する情報についてだ。2019年11月12日に Drake University にて UD に関する研究を行っている Molly Wuebker 先生にインタビューのお時間をいただき、UD を観光に導入する際に、重要な点についてご意見を伺った。観光地へのアクセシビリティについてお話して下さっていた時、ウェブサイトもその重要な指標だと仰っていた。具体的には、観光客に目的地として選んでいただくためには、施設の構内図や館内案内動画などを公開することが重要だというご意見をいただいた。例えば、①駐車場から施設内までどのように移動するのか、②車いすやオストメイト対応のトイレがどこにあるのか、などといった情報は、観光客が旅行の計画を立てる際に役立つ。また、発達障害を抱える子どもは初めて訪れる場所に大きな不安を感じることも多いことから、安心して旅の準備をしてただけるよう、施設の景観や雰囲気を確認できるコンテンツを十分に整備することが理想とされる。以上より、山梨県が発表している「公共建築のユニバーサルデザインに関する指針」のチェックリスト、「情報」の項目に、ウェブサイトにおける施設案内動画の公開などといったチェックポイントを追加することの必要性を

強く感じた。

写真 5、インタビューに対応して下さった Molly Wuebker 先生と



(出所) 筆者撮影。

(3) その他

①ユニバーサルツアー

新型コロナウイルス感染拡大の影響により留学を中止したため、残念ながら計画していた Iowa International Center²でのインターンシップ、Courage Sport³でのボランティア活動が実現できなかった。今後も継続してアメリカや日本各地で行われているユニバーサルツアーについて調査し、学んでいきたい。

②ピクトグラム

留学生活を通して、はじめて外国人として一定の地域に滞在した私は、ピクトグラムなど案内表記の重要性を再認識させられた。異なる文化の中で過ごす外国人にとって、一目でわかる案内表記は行動の助けになるほか、精神的な安定にも大きな役割を果たすと考えられる。さらに、場所によって表記がバラバラな状態ではなく統一されていると、滞在中に案内表記を確認することに慣れることができ、安心して、落ち着いて行動することにつながるのではないかと感じた。

現在、私の所属する山梨県立大学の吉田均研究室では、甲府市内施設の UD 化の一環として、甲府市生涯学習室歴史文化財課と協働で「甲府市信玄ミュージアムと堀田古城園の UD 化事業」に取り組んでいる。国土交通省によって定められた案内用図絵記号 (JIS Z8210) や、国際規格 ISO7001 等を用いることで、より多くの人々にわかりやすい案内表記の設置を目指している。こうした取り組みが、観光客が快適に過ごすことの一助となることに加え、大学生をはじめ、地域住民も参加可能な UD 化活動のモデルケースとなり、微力ではあるかもしれないが、山梨県内各施設の UD 化に貢献できることを願っている。

² Iowa International Center (<https://iowainternationalcenter.org/> : 2020 年 10 月 16 日現在。)

³ Courage Sports (<https://www.courageleaguesports.com/> : 2020 年 10 月 16 日現在。)

写真 6、日本ものと異なるが理解しやすいアメリカのピクトグラム
(エレベーター (左)、非常口 (中央)、多目的トイレ (右))



(出所) 筆者撮影。

最後に、大村智人材育成基金事業のご支援により、このような貴重な留学の機会をいただけたことに心からの感謝を申し上げ、留学の報告としたい。